

1 悲鳴止まぬ湖

私がこれまで目にした中でもっとも悲しい場所は  
あの旅籠の先の深くて小さな湖  
南に向かう者がたどる山道を  
登りきった先の湖

平らな尾根から窪んでいて 5  
湖の深い縁からは何も見えない  
打ちつける風が止むことなく  
震える小波を凍えさせている

湖の三方は傾斜した土手が石組みされ 10  
残る一方にはイグサが生えて  
黄色に枯れたスゲ草が  
湖を真っ直ぐ縁取っている

湖は四角く黒々として 15  
静寂に包まれた昼時に湖面に映る空も暗く  
頭上に見上げる時よりも  
大地からもっと遠く離れているように見える

山の人々の言うには 20  
真夜中 そこに行く  
死者の恐ろしい叫び声が聞こえるそうだ  
それは突然の 大きく鋭い叫び声だとか

また ある者たちは見たという  
静まり返った夜 くっきりと丸い月が見えるとき  
まるで 中の悲鳴が破裂したように  
湖面まで上がってきた泡が弾けるという

話はその昔 不運なチャールズ王が 25  
王冠を失い 斬首される前のこと  
山頂に建つ旅籠を営んでいた  
ある男にまつわる話である

男は 下層生まれで身持ちも悪く 30  
無法時代の 恐れを知らぬならず者  
ある日の夕方 男の旅籠に  
若くて優男風の騎士が馬でやってきた

髪は巻き毛で 上質のリネンを纏い 35  
柄に宝石をちりばめた剣を差していた  
馬での長旅に  
その騎士は すっかり疲れ切った様子

一夜の宿を求めた騎士は  
大袋を馬から下ろしたが

他人<sup>ひと</sup>には持たせず 自分で抱え  
地面に下ろす時も 側から離さなかった 40

「中は 金貨か宝石に違いない  
国王への献上金を南に運ぶところか」と思った主<sup>あるじ</sup>は  
忠義な臣下の口調でべらべら喋り  
国王讃歌を口ずさみ始めた

客人もそのもてなしに段々と気を許し 45  
ワインでの乾杯に応じた  
しかし 食べ物はほとんど口にせず  
主<sup>あるじ</sup>の後ろから 部屋まで大袋を運んでいった

「それでは ごゆっくり」と主<sup>あるじ</sup>は言ったが  
言葉とは裏腹に 腹の内には悪意を秘めて 50  
クロムウェル側について戦い倒れた息子のことを  
一度たりとも忘れることはなかったのだ

たとえ主<sup>あるじ</sup>よりもはるかに優しい心根の者であっても  
貧しさに復讐心が輪をかけて罪を犯すということはよくある話  
ましてや 主<sup>あるじ</sup>は生まれつき粗暴で 55  
悪事を働くことなど日常茶飯事

真夜中 足音を立てないように靴を脱ぎ  
主<sup>あるじ</sup>は こっそりと客人の部屋に忍び込んだ  
ランタンと短剣を持ち  
眠っている若者を刺したのである 60

刺した瞬間 悲鳴があがった  
大きく 鋭く 恐ろしい悲鳴が  
主<sup>あるじ</sup>は思わず枕で顔を抑えつけ  
そのままじっと 完全に静まり返るまで覆<sup>おお</sup>い被<sup>かぶ</sup>さっていた

それから 息が無いことを確かめようと 65  
灯<sup>あかり</sup>を顔に近づけた  
すると何とした事か 残忍な心臓が止まらんばかり  
殺したのは美しい女であった

日焼けした顔は化粧したもの  
男の頭髪と見えた鬘<sup>かつら</sup>は外<sup>はず</sup>れ 70  
突き刺した胸は女の柔肌  
美しい女の死に様<sup>さま</sup>であった

半ばしまったと思いつつも  
主<sup>あるじ</sup>は 自分の犯した罪で気を失うような柔<sup>やわ</sup>ではない  
ベッドから例の大袋を引き摺り下ろし 75  
略奪品の中身を調べた

紐<sup>ひも</sup>を切り 手を突っ込んで  
人殺しした指で 中をまさぐるや

あるじ 主の額に恐怖の生汗が吹き出して  
訳もわからず動転した 80

指に触れたのは金ではなかった 冷たくもなく  
硬くもなく 肉のような感触  
巻き毛を掴んで引っぱり出したのは  
殺されたばかりの若者の生首

それは 切り落とされた若者の首 85  
さらにぞっとしたのは  
先ほど殺した女と再会したかと思紛うばかり  
二人は瓜二つではないか

きょうだい 兄妹 さながらの二人を  
一つ菰に結わえて 90  
背中に担いで 階段を降り  
そっと旅籠から抜け出した

湖に向かう夜は暗く  
静かで じめじめしていた  
繋いだ小舟を岸辺に引き寄せる時 95  
舟を打つ小波がくすくすと笑った

舟底に背負った菰を降ろし  
平らに均して  
周りを押さえるように  
ごつごつした石を敷き詰めた 100

その上に さらに次から次へと  
これ以上は小舟が保たないところまで石を積み  
あともう一インチで沈むというところで  
男は衣服を脱いで 小舟を岸から押し出した

暗闇の中を 真っ裸で 105  
泳いで押していった  
湖の真ん中まで来ると 舟の中に水を入れて  
恐怖の積荷を沈め 視界から消し去った

泳いで岸に辿り着くと 衣服をまとい  
血糊のついた指をごしごし洗った 110  
それから 家まで走って帰り 殺した女の馬に乗り  
何処ともなく姿をくらました

しかし男は死ぬ前 ある仲間にこの話をした  
誰にも知られていなかったこの話を  
それで 男の唇から吐き出された罪が 115  
犯されたこの地に取り憑いたのである

